

日本人にとってのロシア語の移動表現に 関する問題点

清水 伸子

Abstract

This paper discussed the Russian 'motion verbs' and their prefix verbs. Russian has a peculiar system of motion verbs. It is very difficult for foreigners to choose and decide a verb appropriate for expressing a given motion event. This paper pointed out that there are some differences between Japanese and Russian about cognitive conventions, i. e. how to recognize a given motion event. In Japanese, it is the fundamental factor which works the first in recognizing a given motion event, whether the given motion event is directed to the speaker or not. When a given motion event is directed to the speaker, it is necessary to use a Japanese motion verb 'kuru'. Therefore the distinguishment is very important for Japanese. On the other hand, in Russian it is the fundamental factor whether a given motion event is a process with one direction or not. This paper pointed out that in Russian there are three kinds of representation of motion events. The first is to represent a motion process with one direction. The second is to represent a motion process with two directions, and the last is to put the speaker's viewpoint on a facet in a given motion event. In the latter two cases we examined modal factors and discourse factors relating to choice of appropriate motion verbs; but, when a given motion event is a process with one direction, Russian speakers use Russian verbs of the type 'idti'.

0. はじめに

スラブ諸語の一つであるロシア語は、インド・ヨーロッパ語族に属する言語の一つであるが、同じインド・ヨーロッパ語族のロマンス諸語やゲルマン諸語とは異なる統語論および形態論上の特徴を持っている。その一例として挙げられるのが、動詞の「体」の概念である。ロシア語で伝統的に「体」と呼ばれている概念は、言語学では一般に「アスペクト」と呼ばれるものである¹⁾。ロシア語の全ての動詞は完了体または不完了体のいずれかのアスペクトに属している。つまり、個々の動詞の語彙的意味の中にアスペクトも含まれているのである。したがって、ロシア語では、動詞の語彙的意味とアスペクト上の特徴を切り離すことができ

ず、これがロシア語の動詞研究の難しさの一因となっている。

しかし、ロシア語の動詞には、この「アスペクト」以外の別の意味特徴が絡むために、実際の用法がさらに複雑となっている一群の動詞が存在する。それが「運動・移動をあらわす動詞」である。(以後、「運動の動詞」と略して呼ぶことにする。)
「運動の動詞」と呼ばれるロシア語の動詞は、アスペクトとしては不完了体に属しているのだが、これらの動詞は、その不完了アスペクトの意味特徴以外に「定—不定」と呼ばれる対立を持っている。そして、さらに厄介なことに、この「運動の動詞」の「定動詞」と「不定動詞」からは、接頭辞が付加されることによって別の様々な動詞が派生される²⁾。これらの派生された動詞は、やはり運動・移動をあらわす動詞なのだが、接頭辞が担っている意味が加わるために、意味的に拡張され、アスペクトまでもが変わってしまうこともある。結果として、ロシア語は、運動・移動現象に関わる動詞が豊富な言語となっており、その動詞の意味体系は、日本語の運動・移動をあらわす動詞の意味体系とはかなり異なっている。

このため、運動や移動という現象は、本来どの言語の話者にとっても普遍的な現象であるはずなのだが、この現象を言語化する際に用いる動詞の決定に関して、ロシア語と日本語では全く異なる要因が複数働いている。そして、その複数存在する決定要因が、全て同時に動詞の選択に関わっているわけではなく、動詞を決定するために第一義的に働く要因というものも存在している。しかしながら、従来の「運動の動詞」の研究ではこういったことは指摘されてこなかった。個々の動詞の語彙の意味の記述と、その記述された意味に基づいて、それぞれの動詞が用いられる典型的な文脈が列挙されてきただけであった。以下、本稿では、ロシア語の運動・移動表現の特徴を指摘し、運動・移動現象を言語化する際のロシア語の動詞選択にまず第一義的に関わる要因を考察する³⁾。

1. 動詞の意味規定

この章では、まず、ロシア語動詞のアスペクト上の意味および用法の基本的な違いに触れる。その後、「運動の動詞」の「定動詞」と「不定動詞」および、この両者から接頭辞で派生される動詞の従来の意味規定を見ていくことにする。

1-1 ロシア語動詞のアスペクトの対立

アスペクトとは、動詞に関わる概念の一つである。動詞に関わる概念としては、このアスペクトのほかにテンスなども挙げられるが、テンスとは、出来事が時間軸上のどこにおかれているか（過去／現在／未来）または「過去／非過去」をあらわす概念であり、これに対してアスペクトは出来事の内的構造をあらわす概念であると言われる（Comrie 1976, p. 3）。出来事の内的構造とは、例えば、問題の出来事が完了しているのか、進行中の過程であるの

か、状態なのか、あるいは繰り返しなのかといったことであり、その出来事自体が時間軸上のどこに位置するのかという概念とは別の概念である。

- (1) John read a book.
- (2) John was reading a book.
- (3) John has read a book.

英語では、出来事がいつ起こったのかということは動詞の時制をかえることによりあらわすが、問題の出来事が完了しているのか、進行中であるのかは、動詞を完了形や進行形にすることによってあらわす。このように、通常、動詞の形態の変化によってあらわされる出来事の内的構造はアスペクトと呼ばれる。したがって、次の例に見られるような動詞の語彙的意味の中に含まれているような「状態 (4) (5)」「完了 (6)」の概念は、アクツイオンサルトという別の概念として区別される。

- (4) John lives in Moscow.
- (5) John lived in Moscow.
- (6) I finished it.

ロシア語をはじめとするスラブ諸語に属する言語は、英語のように動詞の形態をかえることによってアスペクトをあらわすのではなく、そもそも動詞自体が完了アスペクトをあらわす動詞（完了体動詞：“perfective verb”以後 perf と略記）と、そうでない動詞（不完了体動詞：“imperfective verb”以後 imperf と略記）とに分かれている。なかでも、ロシア語は、ほとんど全ての動詞の語彙的意味に対してアスペクトの対立が存在しており、かなり整然とした完了体動詞と不完了体動詞の対立からなる動詞体系が存在している。従来から、それぞれの動詞アスペクトの意味を記述するために様々な研究や分析が行われてきた。例えば、Forsyth (1970) は、完了体動詞は「動作・出来事の完了をあらわす」という有標の意味特徴をもつ動詞であるのに対して、不完了体動詞は「動作・出来事が完了しているとも、していないとも言わない」、つまり動作・出来事の「完了性」に対しては無標の動詞であると規定している。Forsyth (1970) がこのような規定を行なうに至ったのは、不完了体動詞が非常に多様な意味をあらわしうるという理由からである。例えば、次の例を見てもわかるように、従来から、ロシア語の完了体動詞は「一回きりの具体的な動作の完了／完了した出来事」をあらわすのに対して、不完了体動詞は「進行中の動作過程・動作の継続」「繰り返し動作・習慣」といった複数の意味をあらわしうることが指摘されているからである⁴⁾。

- (7a) Sergej pročital étu knigu.
セルゲイ nom-3sg-m 読む perf-past-sg-m この本 acc-sg-f
セルゲイはこの本を読んでしまった。(完了体・過去・完了)
- (8a) Včera, kogda ja vernulsja domoj, Sergej čital étu knigu.
昨日 ~の時 nom-1sg 戻る perf-past-sg-m 家に 読む imperf-past-sg-m
昨日私が家に帰ってきたとき、セルゲイは本を読んでいた。(不完了体・過去・進行)
- (9) Sergej dolgo čital étu knigu.
長い間 読む imperf-past-sg-m
セルゲイは長い間その本を読んでいた。(不完了体・過去・持続)
- (10a) V prošlom godu každoe voskresen'e Sergej čital étu knigu.
去年 毎週日曜日 読む imperf-past-sg-m
去年、毎週日曜日にはセルゲイはこの本を読んでいた。(不完了体・過去・繰り返し)
- (11a) Sergej mnogo raz čital étu knigu.
何回も 読む imperf-past-sg-m
セルゲイは何度もこの本を読んだ／読んでいる。(不完了体・過去・繰り返し)

完了体動詞と不完了体動詞はアスペクト上の意味の点で異なるだけでなく、テンス的にも振る舞いが異なる。完了体動詞は「動作・出来事の完了」を意味することから意味的には telic な動詞であり、したがって、テンス的には過去か非過去（過去か未来）の区別しかない。しかしながら、不完了体動詞は「完了」の意味を含まないため、意味的には atelic な動詞であり、現在・過去・未来の3テンスの区別が存在する。

- (7b) Zavtra Sergej pročitaet étu knigu.
明日 読む perf-fut-3sg
明日、セルゲイはこの本を読み終わる（でしょう）。(完了体・未来・完了)
- (8b) Sejčas Sergej čitaet étu knigu.
今 読む imperf-pres-3sg
今、セルゲイはこの本を読んでいる。(不完了体・現在・進行)
- (8c) Zavtra, kogda ja vernulac'domoj, Sergej budet čitat' étu knigu.
明日 ~する時 nom-1sg 戻る perf-past-sg-f fut-3sg 読む imperf-inf
明日、私が家に帰り着くころ、セルゲイは本を読んでいるでしょう。
(不完了体・未来・進行)
- (10b) Každoe voskresen'e Sergej čitaet knigi.
毎週日曜日 読む imperf-pres-3sg 本 acc-pl-f

毎週日曜日にセルゲイは読書をしている。 (不完了体・現在・繰り返し)

(10c) V buduščem mesjace každom večerom Sergej budet čitat' knigi.

来月 毎晩 fut-3sg 読む imperf-inf

来月には毎晩セルゲイは読書をするでしょう。 (不完了体・未来・繰り返し)

(11b) Sergej mnogo raz čitaet étu knigu.

何度も 読む imperf-pres-3sg

セルゲイは何度もこの本を読んでいる。 (不完了体・現在・繰り返し)

(11c) Sergej budet mnogo raz čitat' étu knigu.

fut-3sg 読む imperf-inf

セルゲイは何度もこの本を読むだろう。 (不完了体・未来・繰り返し)

(8) ~ (11) の不完了体動詞があらわしているアスペクト上の意味特性は明らかであるのだが、ロシア語の不完了体動詞の用法には、そのあらわしているアスペクト上の意味特性がはっきりとしない場合も存在する。

(12) Včera čto vy delali?

昨日 何 acc-sg-n nom-2pl する imperf-past-pl

昨日あなたは何をしましたか。

Ja čital étu knigu.

nom-1sg 読む imperf-past-sg-m

昨日私はこの本を読みました。(読んでいました／読んでしまいました。)

(12) の“čital”のような不完了体動詞の用法は、ロシア語では「一般的事実の確認」または「動作の名指し」と呼ばれている。この意味で不完了体動詞が用いられる場合には、不完了体動詞は、その動作あるいは出来事が完了しているのか否かについては何ら触れずに、単に「その動作あるいは出来事が存在する、または、存在した」ということをあらわす。したがって、訳に示したように、この不完了体動詞を含む文のしめす状況はアスペクト的にはあいまいである。

(13) By čitali étu knigu?

nom-2pl 読む imperf-past-2pl

あなたはこの本を読みましたか。(読んだことがありますか。)

Da, ran'se ja ee čital.

はい 以前 nom-1sg それ acc-sg-f 読む imperf-past-sg-m

No ne pročítal.

しかし ~ない 読む perf-past-sg-m

はい、以前読みました（読んだことがあります）。

しかし、最後まで読んではいません（全部は読んでいません）。

- ・ 実は、ロシア語の動詞の用法のなかでは、この「一般的事実の確認」とか「動作の名指し」と呼ばれる不完了体動詞の用法が、最も外国人にとって把握しがたい用法であり、この用法が存在するために、不完了体動詞の意味機能を規定することが難しいといっても過言ではない。例えば、Rassudova (1982) は、この「一般的事実の確認」の用法から不完了体動詞は過去時制において「発話時と関わりを持たない過去の出来事」をあらわし、これに対して完了体動詞過去形は「発話時と関わりを持つ過去の出来事をあらわす」と規定したり、また、不完了体動詞は「遠い過去の出来事」をあらわし、完了体動詞は「比較的現在に近い過去に起こった出来事」をあらわすことがあると説明している (ibid. pp. 45-49)。

しかしながら、概して、ロシア語の完了体動詞と不完了体動詞は双方とも、用いられる文脈によって様々なアスペクト上の意味をあらわすため、同じ状況、同じ文脈で、双方の動詞が使用可能である場合も少なくない。したがって、実際にロシア語を喋る際の動詞の選択に関して、片方のアスペクトの動詞が用いられる可能性を完全に排除するような明確な意味上の規定ができないのが現実である。従来の説明では、ロシア語の完了体動詞は「具体的な動作・出来事を全一的に捉えて提示する」意味機能をもっているが、不完了体動詞はそのような意味機能をもっていないため、「動作過程」「持続」「繰り返し」「習慣」単なる「動作の名指し」といった様々なアスペクト上の意味をあらわすと説明される (Forsyth 1970, Rassudova 1982)。

1-2 「運動の動詞」

1-2-1 「定—不定」の対立

前節では、ロシア語の全ての動詞に関わるアスペクトの概念と、その双方のアスペクト動詞の意味特徴および用法を概観した。この節では、ロシア語の動詞のなかでも、アスペクトに加えて「定—不定」という対立をもつ「運動の動詞」と呼ばれる動詞の意味と用法を見ていく。

ロシア語において、「運動の動詞」と呼ばれる動詞は次の17組の動詞群をさす。最初に挙げているものが定動詞 (“definite verb” 以後 def と略記)、次に挙げるものが不定動詞 (“indefinite verb” 以後 indef と略記) と呼ばれる動詞である。

- (14) *idti—xodit'* : 歩く / *exat' —ezdit'* : 乗り物で移動する / *bežat' —begat'* : 走る /
letet' —letat' : 飛ぶ / *plyt' —plavat'* : 泳ぐ / *lez't' —lazit'* : よじ登る /
bresti—brodit' : うろつく / *polzti—polzat'* : 這う / *nesti—nosit'* : 歩いて運ぶ /
vesti—vodit' : 連れて行く・来る / *vezti—vozit'* : 乗り物で運ぶ /
gnat' —gonjat' : 追いかける / *katit' —katat'* : 転がす / *taščit' —taskat'* : 引きずる /
katit'sja—katat'sja : (スキーなどで) すべる / *nestis' —nosit'sja* : 走る /
taščit'sja—taskat'sja : のろのろ進む / *gnat'sja—gonjat'sja* : 追いかける

この「運動の動詞」と呼ばれる17組の動詞は、それぞれが移動様態の点で意味的に異なっている。アスペクトとしては全て不完了体動詞に属しており、自動詞 (*idti—xodit'*, etc.) も他動詞 (*nesti—nosit'*, etc.) も存在している。これらの動詞は、移動様態に関する意味上の違いを除けば、全ての定動詞は基本的に同じ用法で用いられ、かつ、全ての不定動詞もまた同じ用法で用いられる。以下、定動詞は「*idti* タイプの動詞」、不定動詞は「*xodit'* タイプの動詞」と呼ぶことにする。

idti タイプの動詞と *xodit'* タイプの動詞の意味特徴および用法の違いについては、Judina (1976, 1978, 1985), Murav'eva (1986), 清水 (1995) が詳しく論じている。

1-2-2 *xodit'* タイプの動詞

xodit' タイプの動詞は、①「方向不定の運動・移動」をあらわす場合と、②「二方向運動・移動」をあらわす場合がある。

- (15a) *Včera ja xodil po gorodu.*
 昨日 nom-1sg 歩く indef-imperf-past-sg-m 街を
 昨日私は街を歩き回った。 (方向不定・過去・一回)
- (15b) *On xodit v parke.*
 nom-3sg-m 歩く indef-imperf-pres-3sg 公園の中を
 彼は公園の中を歩き回っている。 (方向不定・現在・一回)
- (15c) *Zavtra ja budu xodit' po gorodu.*
 明日 fut-1sg 歩く indef-imperf-inf
 明日私は街を歩き回るつもりです。 (方向不定・未来・一回)
- (16a) *Na prošloj nedele každyj den'ja xodil po gorodu.*
 先週 毎日 歩く indef-imperf-past-sg-m
 先週、私は毎日街を歩き回った。 (方向不定・過去・繰り返し)

- (16b) Každýj den`ja xožu po gorodu.
 歩く indef-imperf-pres-1sg
 毎日私は町を歩き回っている。 (方向不定・現在・繰り返し)
- (16c) Na buduščej nedele každýj den`ja budu xodit` po gorodu.
 来週 fut-1sg 歩く indef-imperf-inf
 来週は、私は毎日町を歩き回っているでしょう。(方向不定・未来・繰り返し)

ロシア語では、問題となっている運動・移動の方向が不定であるならば、時制およびその運動・移動現象の回数に関係なく、必ず xodit`タイプの動詞を用いる。

xodit`タイプの動詞があらわすもう一つの意味である「二方向の運動・移動」とは、A地点を出発してB地点に行き、そしてさらにB地点を出て行く(A→B→?)という運動・移動のことである。従来から、この意味機能は「往復運動(A→B→A)」と混同されることがあり、まるで xodit`タイプの動詞がその語彙的意味として「往復運動」という意味をもっているかのように扱われることもある。しかしながら、この「一回きりの二方向の運動・移動」をあらわせるのは、(17) (18) からわかるように、xodit`タイプの動詞を過去時制で用いた場合のみであり、現在時制および未来時制で用いられる xodit`タイプの動詞は「複数回の二方向運動・移動」しかあらわせない。(cf. (18b) (18c)) したがって、清水(1995)で指摘したように、(17) でみられるような「往復運動」の意味、つまり「元の場所に戻ってくる」という意味は、xodit`タイプの動詞が本来の語彙的意味としてもっているものではないと言える。「元の場所に戻って来た」という意味が生じるとすれば、それは語用論上の要因のためである^{5, 6)}。

- (17) Včera on xodil v universitet.
 昨日 nom-3sg-m 歩く indef-imperf-past-sg-m 大学へ
 昨日彼は大学に行きました。 (二方向・過去・一回)
- (18a) V prošlom mesjace (každyj den`) on xodil v universitet.
 先週 (毎日) 歩く indef-imperf-past-sg-m
 先週、彼は(毎日)大学に通いました/行きました。(二方向・過去・繰り返し)
- (18b) (Každyj den`) on xodit v universitet.
 歩く indef-imperf-pres-3sg
 (毎日)彼は大学に通っています。(二方向・現在・繰り返し)
- (18c) V buduščem godu (každyj den`) on xodit` v universitet.
 来年 fut-3sg 歩く indef-imperf-inf
 来年彼は(毎日)大学に通います/通うようになります。(二方向・未来・繰り返し)

1-2-3 idti タイプの動詞

idti タイプの動詞は「一方向に向かう運動・移動過程」を意味する。そして、その idti タイプの動詞があらわす「運動・移動過程」は、基本的には運動・移動過程の「開始点と終了点を含まない部分」である。

- (19) *Vot, Sergej idet!*
 ほら セルゲイ nom-3sg-m 歩く def-imperf-pres-3sg
 ほら、セルゲイが来た／歩いてる／歩いていく。 (一方向・現在・一回)
- (20) *Segodnja utrom ja videla,*
 今日 朝 nom-1sg 見る imperf-past-sg-f
čto Sergej šel na stanciju metro.
 ～ということ 歩く def-imperf-past-sg-m 地下鉄の駅へ
 今朝、私はセルゲイが地下鉄の駅のほうへ歩いていくのを見ました。
 (一方向・過去・一回)
- (21a) *Včera, kogda ja šla v universitet, ja uvidela,*
 昨日 ～する時 歩く def-imperf-past-sg-f 大学へ 気づく perf-past-sg-f
čto Sergej šel po drugoj storone ulicy.
 歩く def-imperf-past-sg-m 通りの反対側を
 昨日私が大学に行くとき、セルゲイが通りの反対側を歩いているのを見ました。
 (一方向・過去・一回)
- (21b) *Kogda my budem idti po Leninskomu prospektu,*
 nom-1pl fut-1pl 歩く def-inf レーニン通りを
pokažem tebe počtu.
 示す perf-fut-1pl dat-2sg 郵便局 acc-sg-f
 レーニン通りを歩くときに、郵便局を君に教えてあげましょう。
 (一方向・未来・一回)

この「一方向へ向かう運動・移動」の実際の用法を示すために、idti タイプの動詞は「進行中の運動・移動過程をあらわす (19) (20)」とか「他の出来事の背景となるような運動・移動過程をあらわす (21)」と説明されたりもする (Judina (1976, pp. 20-21))。

また、idti タイプの動詞は、本来「一回きりの運動・移動をあらわす」という回数に関する制限を動詞の語彙の意味のなかに含んでいる。しかしながら、idti タイプの動詞は、xodit' タイプの動詞と同じく、そもそも不完了体動詞であるので、(22) のように文脈の助けがあれば複数回の運動・移動をあらわすことができる⁷⁾。

- (22) Kažyj den', kogda ja idu na rabotu,
 毎日 ～する時 歩く def-imperf-pres-1sg 職場へ
 ja pokupaju gazetu.
 買う imperf-pres-1sg 新聞 acc-sg-f
 私は毎日職場に歩いていく時に、新聞を買います。 (一方向・現在・繰り返し)

・ 1-3 接頭辞によって派生される動詞

1-3-1 接頭辞による動詞派生

1-1節で、ロシア語の全ての動詞は、その語彙的意味の中にアスペクト特性を含んでおり、完了体動詞か不完了体動詞のいずれかに属することを述べた。しかしながら、この両者のほとんどの動詞は、形態論的に互いに独立した別個の存在ではない。ほとんどの動詞が、一方のアスペクトに属する動詞からもう一方のアスペクトの動詞が派生されるという形態論上の派生関係にある。この派生関係で一番多いパターンが、不完了体動詞に接頭辞を付加することにより完了体動詞が派生されるというものである。これは第一次派生と呼ばれる。

- (23) čitat' (imperf) 読む — pročitat' (perf) 読み通す・全部読む
 delat' (imperf) する — sdelat' (perf) し終わる
 pisat' (imperf) 書く — napisat' (perf) 書き終わる・全部書く

ただし、付加される接頭辞は、常に不完了体動詞のあらゆる動作あるいは出来事に完了の意味を加えるものばかりではない。例えば、日本語の複合動詞の右側の成分のような意味を動詞の本来の語彙的意味に付加するような接頭辞も存在する。

- (24) pisat' (imperf) — vypisat' (perf) 書き出す／zapisat' (perf) 書き留める
 perepisat' (perf) 書き写す／popisat' (perf) しばらくの間書く

(24) からわかるように、ロシア語では、動詞に接頭辞が付加されることにより派生される完了体動詞は、もとの不完了体動詞のあらゆる動作および出来事に何らかの限界性の意味が加わった動作および出来事をあらわす。この動作の限界性とは、必ずしも動作・出来事の完成を意味するわけではない。例えば、“pisat'”という動詞は、不完了体動詞であるため、その語彙的意味があらゆる動作には完了の意味は含まれておらず、いかなる限界ももたない atelic な動詞であるが、この不完了体動詞に、持続時間を限定する「しばらくの間」という意味をもつ接頭辞 po が付加されることにより、時間的限界性が加わり end point が含まれる動作・出来事をあらわすこととなる。したがって、派生された“popisat'”は、「完了」の意味

をもつ telic な動詞であり、テンス的には2-1節で述べたように過去と非過去の対立しかない完了体動詞となる⁸⁾。

ロシア語には様々な意味の接頭辞が存在し、かつ、個々の接頭辞は複数の意味をもち、付加される動詞によって意味が異なることも多い。

では、これから本稿のテーマである「運動の動詞」から派生される動詞をみていくことにする。「運動の動詞」である *idti* タイプの動詞と *xodit'* タイプの動詞は、そのあらかず運動・移動の「方向」と「回数」の点で対立をしているが、アスペクト的には共に不完了体動詞に属すると前節で述べた。しかしながら、ロシア語の「運動の動詞」は動詞派生の点で他の不完了体動詞とは異なる振る舞いをする。不完了体動詞から接頭辞により第一次派生されるのは完了体動詞であるはずなのだが、「運動の動詞」では、*idti* タイプの動詞から派生される動詞と *xodit'* タイプの動詞から派生される動詞のアスペクトが異なる。*idti* タイプの動詞からは、他の不完了体動詞と同じく、接頭辞により完了体動詞が派生されるのであるが、*xodit'* タイプの動詞に接頭辞が付くと、その派生された動詞のアスペクトは不完了アスペクトとなる^{9, 10)}。「歩く」と「走る」という意味の動詞からの派生を例として挙げる。(25) からわかるように、*idti* タイプの動詞から派生される動詞 (cf. “*pojti*”, “*pobežat'*”, etc.) も、*xodit'* タイプの動詞から派生される動詞 (cf. “*prixodit'*”, “*pribegat'*”, etc.) も、語彙的意味としては移動様態の点で異なるだけであり、これは他の15ペアの動詞についても全て同じである。

- (25) *idti* (def-imperf) 歩く— *pojti* (perf) 歩いていく・出かける / *prijti* (perf) 歩いてくる・到着する / *ujti* (perf) 歩いて去る・いく / *projti* (perf) 歩いて通り過ぎる / *podojti* (perf) 歩いて近づく / *vyjti* (perf) 歩いて出る / *vojti* (perf) 歩いて入る, etc.
- xodit'* (indef-imperf) 歩く— *prixodit'* (imperf) 歩いてくる / *uxodit'* (imperf) 歩いて去る・いく / *proxodit'* (imperf) 歩いて通り過ぎる¹¹⁾ / *podxodit'* (imperf) 歩いて近づく / *vyxodit'* (imperf) 歩いて出る / *vxodit'* (imperf) 歩いて入る, etc.
- bežat'* (def-imperf) 走る— *pobežat'* (perf) 走っていく・走り出す / *pribežat'* (perf) 走ってくる・到着する / *ubežat'* (perf) 走って去る・いく / *probežat'* (perf) 走って通り過ぎる / *podbežat'* (perf) 走って近づく / *vybežat'* (perf) 走り出る / *vbežat'* (perf) 走って入る, etc.
- begat'* (indef-imperf) 走る— *pribegat'* (imperf) 走ってくる / *ubegat'* (imperf) 走って去る・いく / *probegat'* (imperf) 走って通り過ぎる / *podbegat'* (imperf) 走って近づく / *vybegat'* (imperf) 走り

出る / vbegat' (imperf) 走って入る, etc.

(25) の派生で挙げた接頭辞は一部であり、実際には *idti* タイプの動詞や *xodit'* タイプの動詞に付加される接頭辞は上に挙げた接頭辞以外にもさらに多く存在する。接頭辞は、従来、「出発」とか「目的地に到着」といったアスペク的な意味や「入る」「出る」といった方向の意味を動詞に付加すると説明されてきたが、清水 (1995) では、そういった意味以外に、「運動・移動現象のどの地点・局面に話者 (または聞き手) の視点があるか」という意味を動詞の意味に加える接頭辞が存在することを指摘した。(ibid., pp. 200–212) 以下、接頭辞の意味に着目しつつ、次章の議論に関係してくる接頭辞 *po*, *pri*, *u*, *pro*, *pod* の付加された動詞の意味と用法をみていくことにする。また、本稿では、以後の議論で扱う移動表現は「一回きりの運動・移動」現象に限る。「複数回の運動・移動」現象をあらわす表現は別の特性も存在するため、これについては稿を改める。

1-3-2 *pojti* タイプの動詞の意味・用法

まず、*idti* タイプの動詞に付加される接頭辞 *po* は、運動・移動の開始をあらわす。開始の意味をあらわす接頭辞 *po* は *idti* タイプの動詞にしか付加されない。この派生で形成される動詞 (*poexat'*, etc.) を *pojti* タイプの動詞と呼ぶ。*pojti* タイプの動詞は完了体動詞であり、「出発」をあらわす。

- (26a) Včera posle zanjatija ja pošel v kino.
 昨日 授業後に nom-1sg *pojti* 歩いて出かける perf-past-sg-m 映画へ
 昨日授業の後映画に行きました。
- (26b) Zavtra posle zanjatija ja pojdu v kino.
 明日 *pojti* 歩いて出かける perf-fut-1sg
 明日授業の後映画に行きます。

1-3-3 *prijti* タイプの動詞と *prixodit'* タイプの動詞

接頭辞 *pri* で派生された動詞は、「くる」とか「到着する」という訳語を付けたが、厳密に言うと、これらの日本語の表現に完全に対応しているわけではない。接頭辞 *pri* は、「話者の視点が到着点におかれている」という意味を加える (清水 (1995, pp. 201–205))。したがって、完了体動詞である *prijti* タイプの動詞も、本来動作過程や持続をあらわせるはずの不完了体動詞である *prixodit'* タイプの動詞も、日本語の「来る」とは異なり、運動・移動過程をあらわせない。これは、接頭辞 *pri* の「話者の視点を到着点におく」という意味特性のためである。以下、それぞれのタイプの動詞をみていく。

prijti タイプの動詞は、完了体動詞であるので、そのアスペクト特性からいっても運動・移動過程をあらわせないことは明らかである。テンス的には過去と非過去(=未来)で対立し、語彙的には「到着」をあらわす。しかしながら、現実の現象としては、目的地に到着する前にはもちろん目的地へ向かう運動・移動過程が存在しているはずである。したがって、prijti タイプの動詞は、実際の文脈のなかで話題となっている運動・移動過程全体のなかの「到着の局面」または「目的地」を抜き出して提示する動詞であると言える。

- (27a) Kogda ty priexal v Tokio?
いつ nom-2sg priexat' 乗り物でくる perf-past-sg-m 東京へ
Ja priexal v Tokio včera.
nom-1sg priexat' 乗り物でくる perf-past-sg-m 昨日
いつ東京に着いたの／来たの。昨日東京に着きました／来ました。
- (27b) Kogda ty priedeš' v Tokio? — Ja priedu v Tokio zavtra.
priexat' 乗り物でくる perf-fut-2sg priexat' 乗り物でくる perf-fut-1sg 明日
いつ東京に着くの／来るの。明日東京に着きます／行きます。
- (27c) Kogda ty priexal cjuda?
priexat' 乗り物でくる perf-past-sg-m ここに
Ja priexal v 3 časa.
priexat' 乗り物でくる perf-past-sg-m 3時に
いつ、ここに着いたの／来たの。3時に着きました／来ました。
- (27d) Kogda on priedet ko mne?
nom-3sg-m priexat' 乗り物でくる perf-fut-3sg 私のところへ
On priedet k vam zavtra.
priexat' 乗り物でくる perf-fut-3sg あなたのところへ 明日
いつ、彼は私のところに来ますか。明日の彼はあなたのところへ行きますよ。

接頭辞 pri の意味特性のため、運動・移動過程、つまり「来る途中」をあらわせないことはこの節の冒頭で述べたが、このことは“kogda”節中でこのタイプの動詞を用いてみればはっきりする。(28)の従属節はそれぞれ、「私のところに来て、私のところに居た時」「私のところに来て、私のところに居る時」をあらわし、後続文脈の「売店で」と矛盾するため非文となる。

- (28a) *Kogda on prišel ko mne,
～の時 nom-3sg-m prijti 歩いてくる perf-past-3sg 私のところへ

(30) (31) の「二方向運動・移動 (A→B→?)」の B 地点は「職場」であり, (30) (31) は共に「彼は既に職場を出ていて, 職場にはいない」ということを含意する。しかしながら, (30) では接頭辞 pri の「目的地に視点を集める」という意味機能のために「彼は職場でセルゲイと会った」という解釈しか存在しない。これに対して, (31) の xodit' タイプの動詞は「セルゲイと会った」場所が「職場へ行く途中」, 「職場」, 「職場から帰る途中」のどの解釈もありえる。

1-3-4 ujtı タイプの動詞と uxodit' タイプの動詞

接頭辞 u の基本的な意味は「ある場所からの離反」であるが, 文脈によっては「去って, しばらく, または永久に帰ってこない」などのニュアンスをもつことがある。その他に, この接頭辞 u には, 話者および聞き手の視点を「出発点」に集める意味機能も存在する。言い換えれば, 運動・移動過程全体のなかの「出発点」を抜き出して提示する働きがある。したがって, 「出発」をあらわす pojti タイプの動詞と違って, ujtı タイプと uxodit' タイプの両動詞は運動・移動の「方向」または「目的地」を必ずしも明示する必要はない。

ujtı タイプの動詞は完了体動詞であり, (32) に示すように, 過去と非過去 (未来) の対立しか存在しない。(32a) は「セルゲイはどこかに行った」というよりも, むしろ「セルゲイはここにはいない」ということをあらわす。

(32a) Gde Sergej? — On ušel.

どこ セルゲイ nom-3sg-m nom-3sg-m ujtı 歩いて去る perf-past-sg-m

セルゲイはどこにいるの。— 彼ははいないよ。(どこかに行った/帰ったよ。)

(32b) Kogda Sergej vernetsja v Rossiju? — On uedet v buduščem mesjace.

いつ 帰る perf-fut-3sg ロシアへ uexat' 乗り物で去る perf-fut-3sg 来月

いつセルゲイはロシアへ帰るの。— 彼は来月帰るよ (去る)。

不完了体動詞である uxodit' タイプの動詞があらわす運動・移動過程は, 先にみた不完了体動詞の prixodit' タイプとは異なり, 二種類存在する。一つは, prixodit' タイプの動詞と同じく, 「二方向の運動・移動 (A→B→?)」過程である。この「一回きりの二方向運動・移動」は, xodit' タイプの動詞や prixodit' タイプの動詞と同じく過去形でしかあらわせない。

(33) Na prošloj nedele vas ne bylo doma.

先週 gen-2pl not いる imperf-past-sg-n 家に

Gde vy byli?

どこに nom-2pl いる imperf-past-pl

Ja uezžal (v Minsk) v komandirovku.
 nom-1sg uezžat' 乗り物で去る imperf-past-sg-m (ミンスクへ) 出張で
 先週、家にいませんでしたね。どこに行っていたのですか。
 出張(でミンスク)に行っていました/出張で(ミンスクに行っていたので,) いませんでした。

(33) では、「二方向運動・移動 (A→B→?)」の B 地点がミンスクに相当し、発話時には主語はミンスクには既にはいないということを含意している。

uxodit'タイプの動詞があらわすもう一つの運動・移動過程は、「去ろうとする/出発しようとする」といった「運動・移動過程に移行する前段階に存在する過程」である。この二つ目の過程の意味は、接頭辞 u の「視点を出発点に集める」という意味機能と、不完了体動詞が本来あらわす動作の進行・持続というアスペクト上の意味から生じていると考えられる。例えば、(34a) では、従属節の uxodit'タイプの動詞が「一回きりの二方向運動・移動 (A→日本→?)」過程全体を指し、主文の出来事は「日本に行っている間に、日本で買った」との解釈も可能であるが、通常この文は接頭辞 u の「出発点に視点を集める」という意味機能により、「日本へ出発しようとしている時に(出発する前に)、出発点において買った」と解釈されるのが普通である¹³⁾。

(34a) Kogda on uezžal v Japoniju,
 ~する時 nom-3sg-m uezžat' 乗り物で去る imperf-past-sg-m 日本へ
 on kupil suveniry.
 買う perf-past-sg-m お土産 acc-pl-m
 彼は日本へ行くときに(行く前に)、お土産を買った。

(34b) Sejčas ja uxožu.
 今 nom-1sg uxodit' 歩いて去る imperf-pres-1sg
 今、行くところです/出るところです/出ます/行きます。

(34c) Kogda ty budeš' uxodit' iz doma,
 ~する時 nom-2sg fut-2sg uxodit' 歩いて去る imperf-inf 家から
 zakroj vce okna.
 閉める perf-imperative-2sg すべての窓 acc-pl-n
 家を出るときに、全ての窓を閉めてください。

(35) Kogda ja uxodil v universitet,
 nom-1sg uxodit' 歩いて去る imperf-past-sg-m 大学へ

- (38a) Kogda ona proxodila mimo magazina,
 ～する時 nom-3sg-f proxodit'歩いて通る imperf-past-sg-f 店のそば
 ona našla simpatičnye perčatki.
 見つける perf-past-sg-f かわいい手袋 acc-pl-f
 彼女は店のそばを通り過ぎるときに、かわいい手袋を見つけた。
- (38b) Vot, Sergej! Sejčas on proxodit ostanovku.
 ほら セルゲイ 今 nom-3sg-m proxodit'歩いて通る imperf-pres-3sg バス停 acc-sg-f
 On ne zametil nas.
 not 気づく perf-past-sg-m acc-1pl
 ほら、セルゲイだ！ 今、バス停の所を通ってるよ。僕たちに気づいてないね。
- (38c) Kogda ty budeš' proxodit' mimo éтого pamjatnika,
 nom-2sg fut-2sg proxodit'歩いて通る imperf-inf その記念碑のそばを
 posmotpi na nego vnimatel'no.
 見る perf-imperative-2sg それを 注意深く
 その記念碑のそばを通るときに、注意して見てください。

1-3-6 podojti タイプの動詞と podxodit' タイプの動詞

接頭辞 pod は「接近」の意味を動詞に付加する。

podojti タイプの動詞は完了体動詞であり、テンスに関しては過去と非過去 (= 未来) の対立しかない。

- (39a) On nodošel k nej
 nom-3sg-m podojti 歩いて近づく perf-past-sg-m 彼女のところへ
 i čto-to ej peredal.
 そして 何か acc-sg-n dat-sg-f 渡す perf-past-sg-m
 彼は彼女のそばに来て、そして何かを彼女に渡した。
- (39b) Éto — moja sobaka. Esli ja pozovu imja,
 これは 私の犬 nom-3sg-f もし nom-1sg 呼ぶ perf-fut-1sg 名前 acc-sg-n
 ona podojdet ko mne.
 nom-3sg-f podojti 歩いて近づく perf-fut-3sg 私のところへ
 これは私の犬です。もし私が名前を呼べば、私のそばへやって来ますよ。

podxodit' タイプの動詞は、やはり prixodit' タイプの動詞とは異なり、二種類の運動・移動過程をあらわす。一つは、「一回きりの二方向運動・移動 (A→B→?)」過程であり、これ

は過去形でしかあらわせない。この場合、B地点が接近していく方向をあらわす。

- (40) Éta sobaka podxodila ko mne.
 あの犬 nom-3sg-f podxodit'歩いて近づく imperf-past-sg-f 私のところへ
 A teper' ona cidit daleko ot menja
 一方 今は nom-3sg-f 座っている imperf-pres-3sg-f 私から離れて
 i smotrit na menja.
 そして 見る imperf-pres-3sg-f 私のほうを
 あの犬は私の方へ近づいてきた。しかし今では私から離れて座り、じっと私の方を
 見ている。

(40) の podxodit'タイプの動詞が提示する運動・移動は、「一度私の方へ近づき、その後離れる」という運動・移動過程をあらわす。したがって (40) の第一文は、たとえ後続文脈がなかったとしても、「発話時に犬は私のそばにいない」状況をあらわす。

podxodit'タイプの動詞があらわすもう一つの運動・移動過程は、「接近していく」といった「接近方向の基準点に向かっていく運動・移動過程」である。この二つ目の過程の意味は、接頭辞 pod の「視点を接近方向の基準点に集める」という意味機能と、不完了体動詞が本来あらわす動作の進行・持続というアスペクト上の意味から生じていると考えられる。したがって、iditタイプの動詞が提示する運動・移動過程は、基準点からの距離に関しては無関心な単なる「一方向に向かう運動・移動過程」であり、出発直後の運動・移動とも到着目前の運動・移動とも限定できないのに対して、podxodit'タイプの動詞が提示する運動・移動過程は、同じ「一方向に向かう運動・移動過程」でありながら、その基準点寄りに位置する、つまり、到着目前の運動・移動過程なのである。

- (41a) Kogda poezd podxodil k gorodu,
 ～する時 列車 nom-3sg-m podxodit'歩いて近づく imperf-past-sg-m 街に
 étot nesčastnyj slučaj proizošel v vagone.
 その事故 nom-3sg-m 起こる perf-past-sg-m 客車で
 列車が街に近づいた頃に、その事故は車両内で起こった。
- (41b) Ostorozhno, tramvaj podxodit k ostanovke.
 気をつけて 路面電車 nom-3sg-m podxodit'歩いて近づく imperf-pres-3sg 停留所に
 気をつけて、電車が停留所の方に来るよ。
- (41c) Kogda avtobus budet podxodit' k vašej ostanovke,
 バス nom-3sg-m fut-3sg podxodit'歩いて近づく imperf-inf あなたの停留所に

2. 従来の意味規定の問題点

前章の最後で、ロシア語の運動・移動に関わる動詞の意味・用法を一つの表にまとめたが、従来、ロシア人教師が外国人学習者にこれらの動詞の意味・用法を解説する際には、「定—不定」の対立の中でのみ *idti* タイプの動詞と *xodit'* タイプの動詞の意味・用法を論じ、他方、アスペクト対立の中でのみ *prijti* タイプの動詞や *prixodit'* タイプの動詞といったその他の動詞の意味・用法を論じるのが常である。つまり、運動・移動という一つの現象に関わる動詞が、「定—不定」の対立をなすものと、アスペクトの対立をなすものに分けられ、それぞれ別個に扱われるのである。しかしながら、実際の発話における動詞の選択は、「定か不定か」あるいは「完了体か不完了体か」といった単純な二者択一的なものではない。「定—不定」やアスペクトの対立に関わりなく、できる限り様々な動詞の意味・用法の比較対照を試みているのが Fursenko (1966) と Judina (1976, 1978, 1985) である。特に Judina (ibid.) は接頭辞付きの動詞も含めて数多くの動詞の意味・用法に関して非常に細かい考察を行なっている。しかしながら、実際の発話で正しく動詞を選択できるようになるためには、動詞の意味・用法の把握だけでは不十分であると考えられる。以下、その点も含めて従来の意味規定の問題点を見ていく。

2-1 「他の出来事の背景となる *idti* タイプ」への反論

学習者にロシア語の運動・移動に関わる動詞を教える際には、まず「定—不定」の対立を示しつつ *idti* タイプの動詞と *xodit'* タイプの動詞の意味・用法を教え、その後、接頭辞のついた動詞の意味・用法を教えるのが普通である。確かに、ロシア語の運動の動詞の「定—不定」の対立はかなり特殊なものであり、接頭辞付きの動詞にも共通している特徴もあることから、その意味と用法の違いについて学習者にしっかりと理解させる必要がある。

その際、従来から、*idti* タイプの動詞は「他の動作・出来事の背景となる運動・移動過程をあらわす」用法があると説明される (cf. (21)) (Judina (1976, pp. 20–21))。これは、*idti* タイプの動詞が (21) のような文脈でよく用いられるためであろう。その点からいえば、「他の動作・出来事の背景となる運動・移動過程」は、*idti* タイプの動詞が用いられる典型的な場合の一つであると言えるかもしれない。しかしながら、注意しておかなければならないのは、この「他の動作・出来事の背景となる運動・移動過程」は *idti* タイプの動詞に限られた用法ではないということである。例えば、「二方向運動・移動過程」をあらわす *xodit'* タイプの動詞 (cf. (31)), *prixodit'* タイプの動詞 (cf. (30)), *uxodit'* タイプの動詞 (cf. (34a) (34c) (35)), *proxodit'* タイプの動詞 (cf. (38a) (38c)), *podxodit'* タイプの動詞 (cf. (41a) (41c)) など、他の動作・出来事の背景となる運動・移動過程」をあらわしうるのである。特に、*proxodit'* タイプの動詞と *podxodit'* タイプの動詞などは、すでに前章で見たように、*idti* タイプ

の動詞と同じく「一方向に向かう進行中の運動・移動過程」をもあらわすのである (cf. (38a) (38c) (41a) (41c))。

以上のことより、従来の idti タイプの動詞の意味・用法の説明として「他の動作・出来事の背景となる運動・移動過程」を挙げるのは適切ではないと言える。「他の動作・出来事の背景となる運動・移動」だからと言って、常に idti タイプの動詞が選択されるわけではないのである。

2-2 談話レベルの要因の存在

この節では、ロシア語で運動・移動現象を言語化する際の動詞選択を左右する要因として、個々の動詞の語彙の意味や用法以外のものが存在することを指摘する。

一般に、ロシア語の運動・移動表現を問題にする場合、一つの状況で複数の動詞の使用が可能であるケースが多く存在すると指摘されている (Fursenko (1966), Judina (1978, 1985))。例えば、劇場に行った帰り道に会った知り合いから「どこに行ったの」と質問された場合、その答え方は以下の2種類ある。

(42a) Gde vy byli? — Ja xodila v teatr.

どこに nom-2pl いる imperf-past-pl nom-1sg 歩く indef-imperf-past-sg-f 劇場へ
どこに行ってたんですか。— 観劇に行っていました。

(42b) Gde vy byli? — Ja idu iz teatra.

歩く def-imperf-pres-1sg 劇場から

どこに行ってたんですか。— 観劇の帰りです。 Judina (1985, p. 97)

(42a) の答えでは、*xodit'* タイプの動詞を用いることにより、「二方向運動・移動過程 (A→劇場→発話場所)」という状況を聞き手に提示することで質問に答えている。一方 (42b) では、*idti* タイプの動詞の現在形を用いることにより、「一方向運動・移動過程 (劇場→発話場所) の途中である」という状況を提示することにより質問に答えている。

(42) の複数の動詞の使用の可能性は動詞の語彙の意味や用法で説明できる場合であった。しかしながら、それぞれの動詞選択の根拠が動詞の語彙の意味や用法だけでは説明しきれない場合も存在する。

(43) Segodnja utrom ja otvozila mnogo knig na počtu.

今日 朝 nom-1sg 乗り物で届ける imperf-past-sg-f たくさんの本を 郵便局へ

Snačala ja poexala / priexala na počtu okolo stancii Oxotnyj rjad,

最初 poexat' 乗り物でいく / priexat' 乗り物でくる perf-past-sg-f

no segodnja tam bylo zakryto.

しかし そこで ~である imperf-past-sg-n 閉まっている

今朝、私はたくさんの本を郵便局へ運んで行きました。最初、アホートニー・リヤートのそばにある郵便局へ行きましたが、今日そこは閉まっていました。

(i) I potom ja poexala /*priexala

だから その後 poexat' 乗り物でいく /*priexat' 乗り物でくる perf-past-sg-f

na druguju počtu okolo stancii Čistye prudy.

別の郵便局へ

だから、その後、チーストウエ・プルドウィにある別の郵便局へ行きました。

(ii) I potom ja poexala / priexala na druguju počtu okolo stancii Čistye prudy.

Tam bylo mnogo narodu,

そこで いる imperf-past-sg-n たくさんの人

poétomu mne prišloc' dolgo ždat'

だから dat-1sg ~しなければならぬ perf-past-sg-n 長く 待つ imperf-inf

na rukax c knjigami.

手に本を持って

だから、その後、チーストウエ・プルドウィにある別の郵便局へ行きました。そこは、込んでいたので、私は本を手を持って長いこと待たなくてはなりませんでした。

(43) は一つの談話である。その後半部 ((i) (ii)) の談話の内容を比べると、(ii) の談話の方が別の郵便局での様子を描写する談話が加わって、(i) の談話よりも多少長くなっているだけであり、(i) (ii) の談話の第一文があらわしている出来事はともに同じである。ところが、(43) の後半部の談話が (i) であるか (ii) であるかによって、「別の郵便局へ行った」ことを描写するのに使用できる動詞が違ってくる。つまり、文脈も動詞選択に関係してくるのである。

文脈といった談話上の要因が動詞の選択を左右するような場合は、動詞の語彙的意味や用法を見ているだけでは説明しきれない。文脈によって、動詞選択が変わってくるということは、どの動詞を用いるかということにストーリー展開が関係しているということであり、ロシア語の運動・移動に関わる動詞の選択にはテキストの結束性が関わっていると言える¹⁶⁾。

2-3 日本語の「行く・来る」との相違点

今までの議論より、ロシア語の運動・移動に関わる動詞の難しさは、語彙的意味やアスペクト上の意味、または談話レベルでの要因といった日本語の運動・移動動詞にはない特性が存在するためであることが明らかとなった。しかしながら、本稿では、日本人学習者にとっ

てロシア語の運動・移動に関わる動詞を難しくしている最大にして最も基本的な原因は別に存在していると考えられる。それは、運動・移動現象の把握の仕方がロシア語と日本語では異なるという認知言語学上の原因である。

日本語の運動・移動動詞の語彙的意味については、大江 (1975)、池上 (1981)、宮島 (1984)、田中・松本 (1997) で詳しく考察されている。これらの研究では、日本語の運動・移動動詞は、「歩く」「走る」といった「様態」の移動動詞と、「行く」「来る」といった「方向」の移動動詞に分けられるとされる。そして、「様態」の移動動詞は、二格やへ格といった着点や方向をあらわすものとは共起しないが、移動範囲をあらわすマデ格や経路をあらわすヲ格と共起するという特徴が指摘されている。一方「方向」の移動動詞は、共起する格に関する制約は存在しないが、「来る」は「問題の運動・移動が話者または話者の領域に向かう運動・移動」であることをあらわし、「行く」は「問題の運動・移動が話者から離れていく方向に向かう運動・移動」または「問題の運動・移動の方向が話者にとって接近でも離反でもない中立的なものである」ことをあらわすと説明されている。

(44) 日本語 「様態」の動詞 ①二格やへ格といった着点句や方向句との共起不可

②マデ格や経路をあらわすヲ格と共起可

「方向」の動詞「来る」：話者または話者の領域に向かう運動・移動

「行く」：話者から離れていく方向に向かう運動・移動

：話者にとって接近でも離反でもない運動・移動

(45a) 竹内さんは駅に行きます／来ます。

(45b) *竹内さんは駅に歩きます。

(45c) *竹内さんは駅へ歩きます。

(45d) 竹内さんはこの道を駅まで歩きます。

このような日本語の移動動詞の特性を見てくると、日本語で運動・移動現象を言語化する際には、移動範囲や経路が問題となっているのか否かを第一に把握すればよいと思えてくるが、実際にはそうではない。マデ格を用いる場合でも、「様態」の運動・移動動詞だけでは非文となる場合が存在する (清水 (2000, pp. 79-80))。

(46) ここまで車で (来たのですか) ?

(i) */?いえ、ここまで歩きました。

(ii) いえ、ここまで歩いて来ました。

(46) からわかるように、日本語では、移動範囲のマデ格であっても、問題の運動・移動

が発話の場所つまり話者に向かう運動・移動であるならば「方向」の移動動詞を使わなければ非文または不自然であることがわかる。このことから、日本語は、問題となっている運動・移動現象を言語化する際に、その運動・移動が「話者に向かう運動・移動であるのか否か」をまず第一に判断しなければならない言語であると言える。そして、このことは、話者に向かって歩いて来る人物に気づいて「あっ、〇〇さんが来る／来た。」と言うことはあっても、「様態」の動詞だけを用いた「あっ、〇〇さんが歩いている。」という発話は不自然であるという事実からも裏付けられる¹⁷⁾。つまり、日本語は、認知論的観点から見て「方向」に敏感な言語なのである。

日本語が「方向」に敏感な言語であるという証拠はさらに存在する。それは、問題となっている運動・移動が、主語の「家」のような、主語にとって帰属度の高い場所への移動の場合には、「帰る」「戻る」という動詞を用いなければならないという制約である¹⁸⁾。

(47a) 昨日、堀江さんは自分の家に帰った。／戻った。

(47b) 昨日、堀江さんは自分の家に*行った。/*来た。/*歩いた。/*/?歩いて行った。
/*歩いて来た。

日本語が認知論的に言って「方向」に敏感な言語であるということは、つまり、われわれ日本人話者は、まず第一に、そして無意識に、その運動・移動が「話者に向かってくる運動・移動であるのか否か」という観点から、言語化したい運動・移動現象を眺めるということを意味している。実は、これがロシア語の運動・移動表現にとっては無意識の障害となる。なぜなら、ロシア語は「話者に向かう運動・移動であるのか否か」によって用いられる動詞が変わることはないからである。したがって、日本語の複数の訳に対応する唯一のロシア語文が (48) なのである。

(48) *Vot, Sergej idet (sjuda/tuda).*
ほら セルゲイ nom-3sg-m 歩く def-imperf-pres-3sg (ここへ／むこうへ)
ほら、セルゲイが来た。／来る／歩いていく。／歩いている。

この違いに関して、日本人のロシア語学習者のみならず、ロシア語を学習する他の多くの印欧語話者にとって不幸なことが二つある。まず一つには、ロシア人の研究者やロシア語を外国人に教えているロシア人教師自身が、この違いを認識していないということである。筆者が調べた限り、この違いを指摘したり、また、この違いに対して学習者の注意を喚起するような記述がある研究書や参考書は一切ない。もう一つのロシア語学習者にとっての不幸は、ロシア語の移動表現では「話者に向かう運動・移動であるか否か」の違いは動詞の選択に反

映されないはずなのに、この違いが動詞の選択に反映しているように見える場合が存在しているということである。

(49) On xodil k nej?
 nom-3sg 歩く indef-imperf-past-sg-m 彼女のところへ
 彼は彼女のところへ行っただけですか。

(i) Da, on xodil k nej včera.
 はい 歩く indef-imperf-past-sg-m 昨日
 はい、彼は彼女のところへ昨日行きました (よ)。

(ii) Da, on prixodil k nej včera.
prixodit'歩いてくる perf-past-sg-m
 はい、彼は彼女のところへ昨日来ました (よ)。

(49) の質問に対して、xodit'タイプの動詞を用いた (i) と prixodit'タイプの動詞を用いた (ii) の二つの返事が挙げられているが、どちらを用いて返事をするかによって状況が異なる。この違いは、(ii) のように prixodit'タイプの動詞を用いる場合は、「彼が彼女の家に来た時、話者も彼女の家にいた」という場合であり、(i) のように xodit'タイプの動詞を用いる場合には「彼女の家に話者はいなかった」と説明される。したがって、(49) のような例を見ると、このような場合の prixodit'タイプの動詞と xodit'タイプの動詞は、丁度訳語が日本語の「来る」と「行く」に対応しているように、「話者に向かう運動・移動か否か」によって使い分けられているような印象を学習者に抱かせやすいのである。

しかしながら、(49) は「話者に向かう運動・移動か否か」によって動詞が使い分けられているわけではない。なぜなら、1-3-3節の (30) (31) で述べたように、xodit'タイプの動詞と prixodit'タイプの動詞の違いは「方向」ではなく、「話者の視点がどこに置かれるのか」という点で異なっているからである。1-3-3節で、接頭辞 pri には「話者の視点を目的地に集める」意味機能があると述べた。(49) の (i) (ii) 共、「彼」の「A→彼女の家→?」という二方向運動・移動をあらわしているが、話者が彼女の家にいた場合には「彼女の家」に話者の視点が置かれる prixodit'タイプの動詞を用いなければならないということなのである。そして、話者および「話者のいる場所」に優先的に視点を置くような表現・動詞が選択されるという事実は、実はロシア語に限ったことではない。なぜなら、久野 (1978, pp. 127-284) が指摘しているように、どの言語においても、話者、つまり一人称は、最も共感度の高い存在としての扱いを受けるからである。したがって、「方向」に敏感な日本語においても、その「方向」を把握するために話者に視点を置いて運動・移動を眺めるのであり、英語においても、一人称が動作者である出来事は通常一人称動作者の側から事態を描写する能動文で表現し、

被動作者の側からの描写となる受動文で出来事をあらわすことはないのである。

(50a) I hit John.

(50b) */? John was hit by me.

以上のことより、本稿では、ロシア語で運動・移動現象を言語化する際に、動詞選択を左右する要因として、まず一番最初に考えなければならないことは「どのような運動・移動過程、または運動・移動過程のどの局面が問題となっているのか」ということであることを提案する。次の章では、この本稿の提案に基づいて、ロシア語の移動表現の特徴をさらに考察していく。

3. ロシア語の移動表現における特徴

前節で、ロシア語の移動表現では、問題の運動・移動現象が「どのような過程なのか」、あるいは「どの局面を問題にしているのか」といったことが、動詞選択を左右する要因の一つであると提案した。1-4節の表からもわかるように、ロシア語の移動表現では、話者が表現しようとする状況あるいは現象が、「出発」、「到着」、「離反」、「通過」、「接近」の瞬間といった点的局面なのか、「二方向運動・移動過程」なのか、「一方向への運動・移動過程」なのかによって、用いることができる動詞の候補が変わってくる。

しかしながら、点的局面あるいは「二方向運動・移動過程」が問題とされる場合、どの動詞を用いるべきかを決定することは実は容易なことではない。なぜなら、動詞決定にはさらに別の要因が絡んでくるからである。例えば、(43) でみたような談話レベルの要因もその一つである。通常の発話では、人はいくつかの出来事を挙げていきながら一つの談話を構築していくものである。したがって、列挙する出来事が一つの談話としての結束性を持つためには、視点をどこに置くか、または、視点の一貫性が当然関係してくる。点的局面や「二方向運動・移動過程」をあらわす動詞は、もともと語彙的意味として視点の概念を含むため、その視点のことも考慮に入れなければ適切な動詞を選ぶことができないのである。また、談話レベルの要因以外に、動詞のアスペクト要因が関係する場合も存在する。

- | | | |
|-------------------|----------------------|------------|
| (51a) Zavtra nado | <u>pojti</u> | na rabotu. |
| ～しなければならない | pojti 歩いていく perf-inf | 職場へ |
| (51b) Zavtra nado | <u>idti</u> | na rabotu. |
| | 歩く def-imperf-inf | |

明日職場に行かなくてはなりません。

4. 「一方向に向かう移動過程を問題にしているのか否か」の重要性

4-1 現在時の場合

発話時に「一方向に向かう運動・移動過程」とは、要するに、発話時に進行中の運動・移動を指す。本稿の提案に基づけば、ロシア語で「発話時において進行中の運動・移動過程」を言語化する際には、ほぼ無条件で *iditi* タイプの動詞が用いられるということになる。以下、この節ではこの予想が正しいかどうかを検証していく。

2-3節において、日本語と違ってロシア語では「一方向への運動・移動過程」が問題になる場合には *iditi* タイプの動詞を用いることを指摘し、発話時において進行中の運動・移動過程をあらわした (48) を例として挙げた。しかしながら、1-3節や1-4節での議論を思い返すと、実は、「発話時において進行中の運動・移動過程」をあらわせるのは *iditi* タイプの動詞以外にも存在していることがわかる。*proxodit'* タイプの動詞や *podxodit'* タイプの動詞を現在形で使用した場合である (cf. (38b) (41b) (53))²⁰⁾。

- (53a) Tramvaj ideti!
路面電車 nom-3sg-m 歩く def-imperf-pres-3sg
電車が来るよ。／来たよ。／通って行くよ。／通るよ。／走って行くよ。
- (53b) Tramvaj proxodit!
proxodit' 歩いて通過する imperf-pres-3sg
電車が通って行くよ。／通るよ。
- (53c) Tramvaj podxodit!
podxodit' 歩いて近づく imperf-pres-3sg
電車が近づいて来るよ。／近づいて来たよ。

日本語は「方向」に敏感な言語であり、したがって話者は動いている電車を目撃して、その状況を言語化しようとする時には、(53) の全ての日本語訳を見てもわかるように、「方向」をあらわす動詞を必ず用いる²¹⁾。電車が話者に向かってきているならば「来る」を用い、電車が話者から遠ざかって行く場合や、電車の走っていく方向が話者にとっては接近とも離反とも特徴付けられない場合には「行く」「通る」を用いる。しかしながら、ロシア語では、停留所で電車を待っている場合でも、道端に立って動いている電車を眺めている場合であっても、通常 (53a) を発話する (Judina (1985, pp. 98–99))。確かに、(53b) (53c) は統語論的にも意味論的にも問題ない文章であるのだが、実際のロシア人話者の言語使用の観点から見ると、*iditi* タイプの動詞を用いた (53a) が最も多く発話される文である。これは、電車と話者の距離の長短も関係していない。日本語で「気をつけて、電車が通るよ。」「気をつけ

て、電車が来てるよ。」という発話がなされる状況であっても、通常ロシア人話者は単に「電車が動いている」という、「接近」のニュアンスも「通過」のニュアンスも含まない (53a) を発話するのである。つまり、言語使用の習慣として、「近づいてきている」とか「通過していく」といった日本語に相当する表現の使用頻度が高くないということであり、言い換えれば、ロシア語では問題の運動・移動現象が「発話時に運動・移動中であるか否か」の判断が重要な言語であると言える。

では、「丁度今、通過しているところ」、「丁度今、近づきつつあるところ」をあらわす proxodit'タイプや podxodit'タイプの動詞は、実際の発話では用いられないのかというところというわけではない。ただ、言語化に先立つ状況把握の際には、ロシア人にとって「一方向に向かう運動・移動過程であるか否か」の状況の違いが際立ったものとして認知されるのであり、「通過」であるのか「接近」であるのかといった違いは、ロシア人の認知構造から見て「一方向に向かう運動・移動過程」の下位概念であると思われる。したがって、発話時に眼前で展開している「一方向に向かう運動・移動過程」を言語化する際には、通過をあらわす“mimo + 属格”、あるいは接近方向をあらわす“k + 与格”という前置詞句が添えられたとしても、動詞は idti タイプを用いることが多いのである。

(54a) *Vot, Sergej idet mimo apteki.*

ほら セルゲイ nom-3sg-m 歩く def-imperf-pres-3sg 薬局のそば
ほら、セルゲイが薬局のそばを歩いているよ。／通り過ぎていくよ。

(54b) *Vot, devočka idet k Sergeju.*

女の子 nom-3sg-f 歩く def-imperf-pres-3sg セルゲイの近くへ
ほら、女の子がセルゲイの方へ近づいていくよ。

逆にいえば、proxodit'タイプの動詞や podxodit'タイプの動詞は、問題の運動・移動現象が「通過」あるいは「接近」であると強調することを望む話者の積極的な意図がなければ用いられないと言える。

4-2 未来時・過去時の場合

ロシア人にとって、言語化に先立つ状況把握の際には「一方向へ向かう運動・移動過程であるか否か」の違いが際立って認知され、その運動・移動現象が「通過」か「接近」といったことは認知的には下位概念であると前節で述べたが、未来時、過去時の「一方向に向かう運動・移動過程」が問題となる場合でも同じである。

未来のある時点、または過去のある時点での「一方向に向かう運動・移動過程」は、現在時と同じく idti タイプの動詞、proxodit'タイプの動詞、podxodit'タイプの動詞があらわしうる

(cf. (20) (21a) (21b) (38a) (38c) (41a) (41b))。したがって、(38) (41) の状況を *idti* タイプの動詞と入れ替えることも基本的には可能である。その場合の意味の違いはほとんどない。ただし、*idti* タイプの動詞が用いられる頻度が圧倒的に高い現在時と違って、過去時・未来時で「一方向に向かう運動・移動過程」が問題となる場合、*idti* タイプの動詞の使用の優しさは多少落ちると言わなければならないかもしれない。特に、問題となっている運動・移動の方向が、単なる「方向」をあらわす「*v / na* + 対格」ではなく、「近くの方へ」という意味をあらわす「接近方向」の「*k* + 与格」という前置詞句で提示される場合には、*podxodit'* タイプの動詞の方が *idti* タイプの動詞よりも自然であると感じるネイティブスピーカーが若干存在した²²⁾。これは、未来時・過去時の状況を描写する場合には、いったん頭の中に問題の現象・出来事をイメージする、あるいはフィードバックするため、状況をより客観的に認識する傾向があるためであろう。眼前の状況の認知と言語化がほぼ同時に行なわれるため、現在時ではその臨場感のみが強く認識されるのに対して、過去時・未来時では認知構造としては下位概念である「通過」や「接近」といったニュアンスが現在時の場合よりも意識されやすいことが関係しているであろう。

いづれにしても、現在時と同じく、未来時・過去時で「一方向に向かう運動・移動過程」が問題となる場合であれば、*idti* タイプの動詞を用いて、ほぼ問題なく状況を言語化することができる。したがって、未来時・過去時の運動・移動現象を言語化するための動詞選択の際にもロシア語ではまず問題の運動・移動現象が「一方向へ向かう運動・移動過程であるのか否か」をまず第一に判断しなければならないといえる。

最後に、過去時において問題の運動・移動が「一方向に向かう運動・移動過程であるのか否か」の区別が動詞選択を左右する大事な判断基準となっている例の一つ挙げておく。

(55) *Ran'she ty skazal, čto ty poedu v Moskvu. Ty byl?*

君は以前モスクワへ行くって言ってたけど、行ったのかい。

(i) *Da, ja ezdil na 2 nedeli.*

はい *nom-1sg* 乗り物でいく *indef-imperf-past-sg-m* 二週間の予定で

はい、二週間の予定で行ってきました。

(ii) *Da, ja *ezdil na 2 nedeli, a byl 3.*

乗り物でいく *indef-imperf-past-sg-m* しかし いる *imperf-past-sg-m*

*はい、二週間の予定で行きましたが、3週間（モスクワに）いました。

(iii) *Da, ja exal na 2 nedeli, a byl 3.*

乗り物でいく *def-imperf-past-sg-m*

はい、二週間の予定で行きましたが、3週間（モスクワに）いました。

この会話は内容的に言って、モスクワ以外の場所で発話されたものであるが、(i)(ii)(iii)のうち(ii)だけが非文である。Judina (1985, pp. 106-107)は、この現象は予定期間をあらわす前置詞句“na + 対格”と運動の動詞の間に存在する特殊な共起制約の一例として紹介している。しかしながら、ロシア語では、まず状況把握の際に、問題の運動・移動現象が「一方向に向かう運動・移動であるのか否か」という区別が必要な言語であるという立場に立てば、この共起制約は特殊な例ではない。(i)では xodit'タイプの動詞の過去形が用いられているが、この場合は「二方向運動・移動」をあらわしている。「二週間の滞在予定」という事実は、往路・復路の両移動過程において事実である。ところが、「二週間滞在予定で出かけたが実際には3週間滞在した」という場合には、前置詞句のあらわす「二週間の予定」は往路の移動過程でのみ事実であり、復路の移動過程においては事実ではない。したがって、idtiタイプを用いて「一方向へ向かう運動・移動過程」である往路のみを提示する(iii)が適文であり、(ii)は非文となるのである。(発話場所がモスクワ以外ということから、実際の出来事としての復路の有無が問題となっているわけではない。)

4-3 その他場合

今まで、現在時・未来時・過去時といった、ある特定の時点に位置する運動・移動現象が問題となる場合を見てきたが、この節ではそのような時間軸上の特定の時点に位置しない「一方向に向かう運動・移動過程」が問題となる場合を考察する。動詞が時間軸上のある特定の時点に位置しないということは、運動・移動現象に関わる動詞自体が時制をもたず、不定形で用いられるということである。(ただし、(51)のようなムードが関係する場合は、モダリティーとアスペクトの共起制約が存在するためここでは除外し、モーダルな意味を含まない発話のみを扱う。)

この場合も、未来時・過去時の場合と同じく、idtiタイプの動詞を用いれば、ほぼ問題なく状況を言語化することができる。

- (56) Bez lifta očen' trudno nesti
エレベーターなしで とても大変 歩いて運ぶ def-imperf-inf
tak mnogo vešcej v moju komnatu.
そんなにたくさんの荷物を私の部屋へ
エレベーターを使わずに、そんなにたくさんの荷物を私の部屋へ運ぶ／運んでくる／
運んでいくのは大変です。
- (57) Očen' trudno idti mimo apteki. (Remont idet.)
歩く def-imperf-inf 薬局のそば (工事していますから。)
薬局のそばを歩く／通るのはとても大変です。(工事していますから。)

- (58) Očen' trudno idti k étomu zdaniju. (Remont idet.)
 歩く def-imperf-inf あの建物の近くへ
 あの建物の近くへ行くのはとても大変です。(工事していますから。)

(56) (57) (58) では、全て *idti* タイプの動詞が用いられている。確かに、(57) (58) ではそれぞれ、「通過」や「接近」のニュアンスをもつ *proxodit'* タイプの動詞や *podxodit'* タイプの動詞と入れ替えることは可能である。しかしながら、その場合でも意味はほとんど変わらない。したがって、やはり「一方向へ向かう運動・移動過程」であるならば言語化で使用する動詞は無条件で *idti* タイプの動詞が使えるということであり、実際の言語を使用する場面では「一方向へ向かう運動・移動過程であるか否か」の判断が最も基本的かつ重要なものだと言える。

5. 結論

「運動の動詞」の専門家であるモスクワ大学教授の Judina 氏から、以前、興味深い話を聞いたことがある。氏は、長年、研究と同時に外国人に「運動の動詞」を教えてこられたのであるが、氏の経験から言って、ロシア語の運動・移動に関わる動詞の難しさは「初歩の学習者は間違いを犯すことが少ないのに対して、接頭辞付きの動詞の意味や用法をより勉強している中・上級の学習者ほど犯す間違いが多くなる」というのである。しかしながら、実はこれは当然のことと考えられる。ロシア語の運動・移動現象に関わる動詞の用法は、1-2、1-3 節でも見たように、動詞の語彙的意味・アスペクト・時制制約が複雑に絡んでおり、その上、実際に状況を言語化する際の動詞選択には、2章でみたように、談話上の要因や状況把握の際の認知特性の根本的な違いが障害となるからである。

本稿では、実際の発話におけるロシア語の動詞選択の難しさの一因は、言語化に先だつ状況把握の仕方がロシア語と日本語で異なっているためであることを指摘した。問題の運動、移動現象を言語化するための状況把握の際に、日本語は「方向」の認知が重要であるのに対して、ロシア語では「運動・移動過程のどの過程、又はどの局面が問題となっているか」についての認知が重要であるという違いが存在する。そしてロシア語では、言語化したい運動・移動現象が「一方向に向かう運動・移動過程」である場合には *idti* タイプを用いて状況を描写することを明らかにした。そして、「通過」や「接近」といったニュアンスはロシア人の認知構造の点から見て下位概念であることも指摘した。以上のような結論より、本稿では、ロシア語の運動・移動に関わる動詞を学習者に教える場合、動詞の語彙的意味や動詞の個々の用法を教えるのと同時に、状況把握をする際のロシア語の認知特性にも注意を払うべきであると主張する。

謝辞

本稿執筆に当たって、モスクワ大学教授 Fursenko 氏、Dovrovol'skaja 氏、Judina 氏、東北大学助教授 Komarov 氏、名古屋大学非常勤講師山崎 Tatiana 氏に多くの有益な指摘・助言をいただいた。謹んで、お礼申し上げます。

注

- 1) ロシア人の研究者の間では、文法範疇であられる体系は「アスペクト」と呼び、ロシア語のように動詞の語彙の中に含まれている体系を「体」と区別して呼ぶ研究者もいるが、通常、欧米の研究ではこの両者は区別していない。本稿では、両者を区別しない立場をとる。
 - 2) ロシア語の「運動の動詞」から接頭辞によって第一次派生される動詞の語幹は、派生前の動詞と同形のものがほとんどであるが、以下の2例は語幹が同形ではない。
 - (i) idti (歩く) —po-jti (歩いていく・出かける), pri-jti (歩いてくる・到着する), u-jti (歩いて去る・いく), pro-jti (歩いて通り過ぎる), podo-jti (歩いて近づく), etc.
 - (ii) ezdit' (乗り物でいく) —po-ezžat' (乗り物でいく・出かける), pri-ezžat' (乗り物でくる・到着する), u-ezžat' (乗り物で去る・いく), pro-ezžat' (乗り物に乗って通り過ぎる), pod-ezžat' (乗り物に乗って近づく), etc.
- したがって、ロシア語の運動・移動に関わる動詞とは、ロシア語で「運動の動詞」と呼ばれる動詞群と、それから派生された動詞であるとは言えないと指摘する研究者もいる。しかしながら、本稿のテーマは、形態論上の分析ではないことから、上記の二例も他の派生動詞と同じものとして扱う。
- 3) その他の要因の詳しい分析は、頁数の関係上、稿を改めることとする。
 - 4) 「繰り返し動作」は不完了体動詞であらわすと述べたが、実は完了体動詞でもあらわすことができる。この完了体動詞の用法は「動作の例示的用法」と呼ばれる。本稿の議論では「一回きりの動作・出来事」の場合のみを取り上げるため挙げなかった。
 - 5) xodit'タイプの動詞の本来の語彙的意味は「二方向運動・移動 (A→B→?)」であると考えれば、なぜ「一回きりの二方向運動・移動」が過去時制でのみ可能であるのかが説明可能である。詳しくは、清水 (1995, pp. 174–183) を参照。
 - 6) ロシア語では「往復運動 (A→B→A)」を語彙的意味としてもつ動詞が別に存在している。完了体動詞の sxodit'タイプである。
 - 7) 本稿の議論では直接関係しないので挙げなかったが、xodit'タイプの動詞と idti タイプの動詞の語彙的意味は、回数制限の有無の点で異なる。この両者の違いは、「繰り返し動作」で現れる。詳しくは、清水 (1995, pp. 192–200) を参照。
 - 8) 第一次派生で形成される完了体動詞は、接頭辞の意味が加わることで意味的に拡張されているため、結果として派生前の不完了体動詞と純粋にアスペクト点でのみ対立する動詞ではなくなる可能性がある。このような場合、第一次派生で形成された完了体動詞は、元の不完了体動詞と体の対立をなす動詞とはみなされない。このような場合の接頭辞付きの完了体動詞に対応する不完了体動詞は、その完了体動詞に接尾辞をつけることによって派生される。これを第二次派生と呼ぶ。

pisat' (書く imperf)
 pere-pisat' (書き写す perf)
 pere-pis-yvat' (書き写す imperf)

- 9) 形態論的に言えば、17ペアー、34動詞の全ての動詞から接頭辞のみによって動詞が派生されるわけではなく、例外が二例存在する。しかしながら、本稿では形態論的分析をするわけではないので、この二例も他の派生動詞と同じものとして扱う。(注2参照)
- 10) 本稿では取り上げないが、接頭辞の意味によっては、xodit'タイプの動詞から派生された動詞が完了体動詞である場合も存在する。
- 11) proxodit'タイプの動詞は、「ある時間歩き回る」という意味の場合には完了体動詞である。
- 12) Fursenko (1966, pp. 43-45) は、接頭辞 po は進行中の運動・移動過程における「運動・移動の新段階の開始」もあらわすことがあると指摘している。
- 13) これは Judina 氏からの口頭の指摘である。
- 14) 「二方向運動・移動 (A→B→?)」をあらわす場合でも、prixodit'タイプの動詞と異なり、proxodit'タイプの動詞が「通過しているところだ」という進行中の運動・移動過程をあらわせるのは、両動詞のB地点の意味の違いにあると考えられる。prixodit'タイプの動詞があらわす「二方向運動・移動」では、B地点は到着点であり、移動主体が通常そこにある時間とどまると認識されるのに対して、proxodit'タイプの動詞ではB地点は通過点であり、B地点通過前と後の運動・移動過程が連続したものとして認識されるからであろう(清水(1995, p. 209))。
- 15) (↑) は、常に過程のその箇所に視点が集められるわけではないことを示している。
- 16) 頁数の関係上、談話レベルの要因についての詳しい考察は稿を改める。
- 17) 「あっ、〇〇さんが歩いている」という発話が自然なのは、例えば「〇〇さんは今歩けないはずだ」といった特殊なコンテクストを必要とする。このような有標の情報構造を持つ談話については扱わない。これは、動詞の語彙的意味のレベルではなくて、談話レベルで扱わなければならない現象である(清水(2000, pp. 80-83))。
- 18) 「帰る」の語彙的意味として、「主語にとって帰属度の高い場所への運動・移動」をあらわすと述べたが、この動詞は次のような用いられ方もする。
- 原さん、今来ていますか。
—午前中に来て、もう帰りましたよ。/*行きましたよ。
—事務所に帰ったのかな。
—いえ、午後は出版社に行くと言っていましたけど。
- 19) このニュアンスの違いについては、Fursenko 氏より口頭で指摘を受けた。氏は、“nado + idti (imperf) タイプの動詞”は「～する時間である」という意味の“pora + 不完了体動詞不定形”と同義であると指摘した。“pora”は、必ず不完了体動詞不定形と共に用いる語である。
- 20) uxodit'タイプの動詞は、本質的には出発点に視点がある表現であり、進行中の運動・移動過程を提示するものではないと考える。
- 21) 「あっ、電車が走ってる」という様態の動詞のみを用いた発話は、「今日は／ここは電車が走っていないはずだ」という前提がなければ不自然な発話となる。つまり、無標の情報構造を持つ談話では発話されないので、この場合には含めない。
- 22) Judina (1978, pp. 84-85) は、idti タイプの動詞と proxodit'タイプの動詞はほぼ同義となることがあるが、距離の記述がある場合には proxodit'タイプの動詞の使用が普通であると指摘している。

略字：

imperf: 不完了体動詞 perf: 完了体動詞 def: 定動詞 indef: 不定動詞 fut: 未来時制 past: 過去時制 pres: 現在時制 inf: 不定形 imperative: 命令形 sg: 単数 pl: 複数 1: 一人称 2: 二人称 3: 三人称 m: 男性 f: 女性 n: 中性 nom: 主格 gen: 属格 dat: 与格 acc: 対格

参考文献

- Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge univ.
1985. *Tense*. Cambridge univ..
- Forsyth, J. 1970. *A grammar of aspect : usage and meaning in the Russian verb*. Cambridge univ..
- Fursenko, D. 1966. Nekotorye nabljudenija nad upotreblenijem pristavočinyx glagolov dviženija, *Russkij jazyk dlja studentov-inostrancev*, 36–58, Vyšaja škola, Moskva.
- Hopper, P (ed.). 1982. *Tense—Aspect ; between semantics and pragmatics*. John Benjamin.
- Hopper, P. 1982. Aspect between discourse and grammar. In *Tense—Aspect ; between semantics and pragmatics*, ed. Hopper, A, 3–18.
- 池上嘉彦. 1981. 『“する”と“なる”の言語学』, 大修館.
1983. 「テキストとテキストの構造」, 『談話の研究と教育 1』国立国語研究所, 7–42.
- Judina, L., Bitextina, G. 1976. *Ustnye trenirovačnye upražnenija po teme ; glagoly dviženija*, Moskovskij univ., Moskva.
1978. *Ustnye trenirovačnye upražnenija po teme ; glagoly dviženija (glagoly dviženija s pristavkami)*, Moskovskij univ., Moskva.
- Judina, L. 1985. *Idti ili xodit' ? : glagoly dviženija v sovremennom russkom jazyke*, Moskovskij univ., Moskva.
- 景山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』, くろしお出版.
- 久野 暉. 1978. 『談話の文法』, 大修館.
- Langacker, R. 1987. *Foundations of cognitive Grammar II*. Stanford univ. Stanford.
- Leech, G. 1983. *Principles of pragmatics*, Longman.
- Levinson, C. 1983. *Pragmatics*, Cambridge. univ..
- 松本 曜. 1997. 「英語の前置詞による‘到達経路表現’—認知言語学的視点から」, 『英語青年』142 : 12, 13–15.
- 宮島達夫. 1984. 「日本語とヨーロッパ語の移動表現」, 『金田一春彦博士古希記念論文集』456–458, 三省堂.
- Murav'eva, L. 1986. *Glagoly dviženija v russkom jazyke*, Pusskij jazyk, Moskva.
- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』, 南雲堂.
- Rassudova, O. 1982. *Upotreblenie vidov glagola v sovremennom russkom jazyke*, Russkij jazyk, Moskva.
- 清水伸子. 1995. 「ロシア語の‘運動の動詞’について」, 『名古屋大学言語学論集』11, 159–224.
2000. 「日本語の認知特性と移動表現」, 『言語と文化』2, 愛知大学語学教育研究室, 75–90.
- Talmy, L. 1985. Lexicalization patterns : Semantic structure in lexical forms. In *Language typology and syntactic description III. Grammatical categories and lexicon*, ed. Tim Shopen, 57–149. Cambridge univ..
- 田中茂範・松本 曜. 1997. 『空間と移動の表現』, 研究社.
- Timberlake, A. 1982. Invariance and the syntax of Russian aspect. In *Tense—Aspect ; between semantics and pragmatics*, ed. Hopper, A, 305–334.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』, ひつじ書房.
- Voloxina, G., Popova, Z. 1993. *Russkie glagol'nye pristavki*, Voronežskij univ., Voponež.